

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に
 B6判
 三五二頁
 三五〇〇円
 必須の知識をすべて網羅！
 初心者から研究者まで使え
 る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
 思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
 景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
 〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
 鶴沢四下 小林見外 下平可都三 関為山
 高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経緯を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 白石六二編 八五〇〇円

国語慣用句辞典 B5 白石六二編 八五〇〇円

国語史辞典 B5 林巨雄他編 八五〇〇円

日本語語源辞典 B5 堀井忠雄編 八五〇〇円

京都語辞典 B5 井之口・堀井編 八五〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 天沼編 八五〇〇円

隠語辞典 B5 堀井・実業編 八五〇〇円

近世上方語辞典 A5 前田編 八五〇〇円

花柳風俗語辞典 B5 堀井・実業編 八五〇〇円

明治新語俗語辞典 B5 堀井・実業編 八五〇〇円

難訓辞典 B5 中山編 八五〇〇円

名乗辞典 B5 荒木良雄編 八五〇〇円

名数数詞辞典 B5 堀井・実業編 八五〇〇円

あいさつ語辞典 B5 奥山・岩間編 八五〇〇円

新版 ことば遊び辞典 B5 鈴木兼三編 八五〇〇円

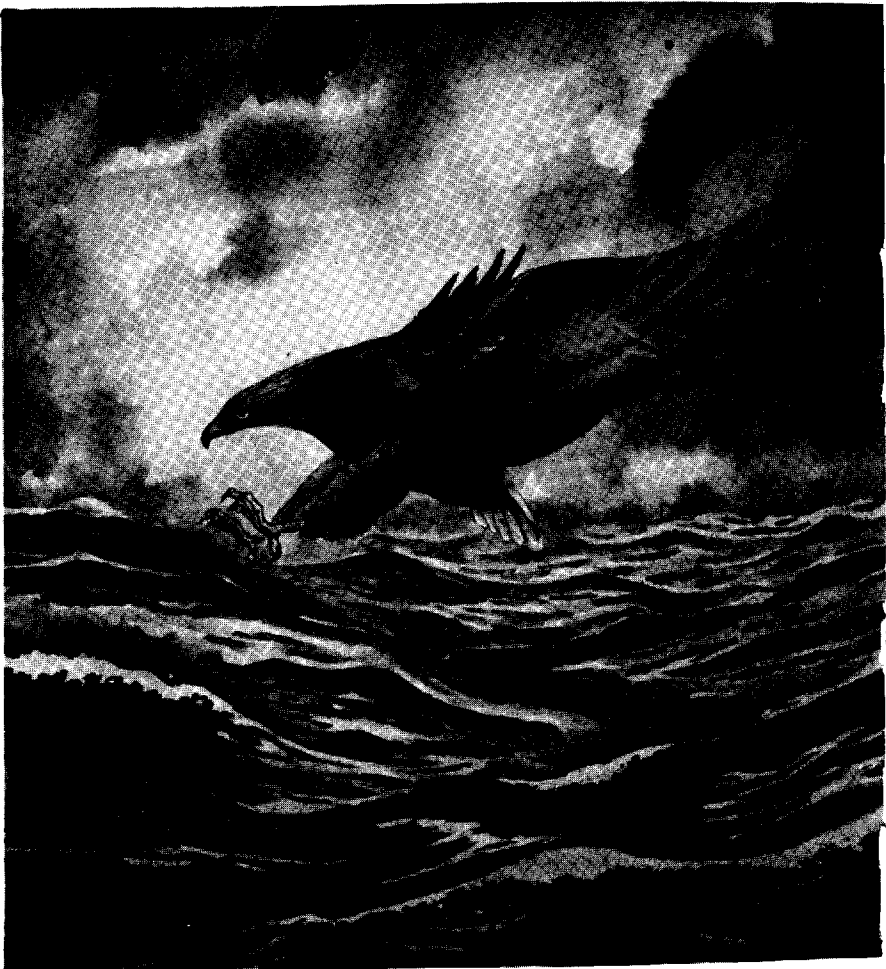
類語辞典 B5 鈴木・広田編 八五〇〇円

類義語辞典 B5 徳川・富島編 八五〇〇円

表現類語辞典 B5 藤原与一他編 八五〇〇円

新版 文章表現辞典 B5 神島・村松編 八五〇〇円

季刊 連句 第36号



101東京都千代田区神田錦町3-7

東京堂出版

電話03-233-3741-7

式目論 (南柏雜記 34)	1
芭蕉の「発句」と「俳句」	東 明雅 2

立机式と二十韻興行	4
式次第	
正式俳諧 次第・役割	5
立机披露記念俳諧之連歌 二十韻	捌 東 明雅
二十韻十一卷	捌 東 明雅 下坂元子 下鉢清子 瀧川雅代...
	名古屋則子 八角澄子 福井隆秀 矢崎 藍
	山崎一恵 若尾よしえ 三好龍肝
立机式以後のことなど	豊田 好敏 12

脇三体	13
「蓑虫」付勝練習二十韻	14

第六回国民文化祭ちば91	
「水と緑とうたびとたち」連句部門あれこれ...	下鉢 清子 16
作品十一卷	捌 秋元正江 内田麻子 式田和子 下鉢清子
	杉内徒司 杉江杉亭 副島久美子 中川 哲
	根津芙紗 福井隆秀 矢崎 藍

芦丈翁聞書	21
-------------	----

第四十回 猫蓑会	24
歌仙七卷	捌 東 明雅 市野沢弘子 大窪瑞枝 坂本孝子
	副島久美子 中島啓世 中田あかり

雁帛往来	29
新講座紹介	11

表紙 (尾白鷺) 宮崎龍火子

式目論
南柏雜記 34
雅

式目がこのごろ連句の世界ではやかましく論じられている。若い人の間には、このように古くて、面倒くさいものは無視し、破棄しようという勇ましい論もあるようだが、もともと、この式目(具体的には去嫌い)は、我々の先祖が、一卷の中で輪廻を避ける為、苦心して考えた結晶であり、貴重な文化遺産とも言うべきものである。一概に無視したり、排撃したりすべきものではない。

私は数年前から、やや面倒で分かりにくい去嫌いの規則を、何とか現代的に整理出来ないものかと考え、数年前、これを単純化した式目歌というものを発見し、これをカードに印刷して弘めている。次の通りである。

①衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし
 ②同じ文字神祇釈教恋無常夜分時分三句去べし
 ③天象に簞降物人倫や名所国名二句隔べし
 ④魚と鳥獣と魚木と草や草と竹とはこれも二句去り

この四首の和歌を覚え、実作の時応用すれば、別に面倒くさいことは一切ない。

①衣(ころも)・季(春・夏・秋・冬)・竹・田・船・

路・夢・泪・月・松・枕、以上の字が登場したら、五句隔てなければ、同じ字は登場できないというわけである。なぜ、これらのものを特別に五句去りにするかと言うと、これは古く連歌の時代からの伝統なのである。一つ位はこんな伝統を残しておいた方がよいと考えたまでである。

②一般の同字は三句去り、その他、神祇・釈教・恋・無常など、表六句に忌避されるものは、印象が強いから三句去り、また、夜分・時分は月との関係から三句去りにした。

③天象(月・日・星の類)・簞(霞・雲・霧・煙などの類)・降り物(雨・露・霜・雪時雨・みぞれ・雪丸・雪の類)・人倫・名所・国名は二句去りである。これらの外、居所・山類・水辺・生類・植物・食物・器財など、凡そのものは右に準じて、原則として二句去りにする。

④魚と鳥・獣と魚とはいわゆる異生類であり、木と草・草と竹の異植物、あるいは異居所なども二句去りとした。

右の式目歌四首を覚えてただけで私は十分であると思う。それは私どもは同じ面はもちろん、一卷の中にも、出来たら同じ物、似たものは重複しないようにする主義であり、滅多に問題は起らないからである。しかし、物によって、時によって、同じようなもの、似たようなものが近くに現われる場合があることは止むを得ない。だから、去嫌いは許される限度を示すものなのである。

芭蕉の「発句」と「俳句」

東 明 雅

発句は「座の文芸」たる俳諧（連句）の第一句であるから、その一座の中で連衆に理解されるときもに共感される必要である。それ故に、発句には賓主の挨拶とともに、時節相応・その場への配慮が求められる。これに対して、新たに明治以後、発句から削り出された俳句は、俳諧の座から離れ、脇・第三以下挙句までの一卷から独立する。だから俳句は賓主の挨拶も、即興や滑稽などの要素も必ずしも必要としない。個に徹し、外に向かつて大きくひらかれ、不特定多数をその読者とするのである。

芭蕉の発句は、今日ではすべて芭蕉の俳句として鑑賞されているけれども、厳密には、脇句以下を伴う発句（立句）と、それを期待しないいわゆる地発句（今日で言う俳句）とを分けて考え、鑑賞すべきではなからうか。「おくのほそ道」の中でも、たとえば「夏草や兵共がゆめの跡」とか、「閑さや岩にしみ入蟬の声」とか、一句の想も形もあまりに完璧に近いものは、その上さらに脇句を付けることは、蛇足であり、発句を反って汚すこと

になる。言い方をかえれば、余意・余情を付ける余白が一句にないのである。「荒海や佐渡によこたふ天河」の句でも同様である。だから、直江津での俳席においては、この句の代わりに、「文月や六日も常の夜には似ず」という句を発句に、「露をのせたる桐の一葉」という脇句が付けられている。これは、「荒海や」の句は地発句としてはすぐれているけれども発句（立句）としては「文月や」の方が優っているという判断が、芭蕉自身にあったことを示しているであろう。

元禄二年五月二十九日、大石田高野一栄の宅での歌仙の発句「五月雨をあつめて涼し最上川」には、「岸にはたるを繋ぐ舟杭」という脇句をつけて一座の興行がなされたのに対し、『おくのほそ道』では、座を離れた形として「五月雨をあつめて早し最上川」になっていることでも了解されるであろう。座の文学としての発句（立句）では一座の主たる一栄に対する挨拶として、「涼し」という賞美の語が用いられたのに対し、六月一日になって、実際に舟で下ることになり、日本三急流の一つをそ

の増水時に実際に下っては、「早し」といわざるを得なくなつたのであろう。

「改作の『早し』は『涼し』より遥かにすぐれているが、それだけにこの程度の力の弱い脇句では寄りつけないのだ」という山本健吉の指摘（『芭蕉その鑑賞と批評』）は、一応、俳句として見た場合は、「早し」という方がすぐれていると解すべきであろう。もちろん、発句として見た場合は、「涼し」の方が数等すぐれているのである。

明治以来、連句というものが俳壇の表面から消え失せていた頃ならば、発句としてよりも俳句としての価値を重視することは、あるいは当然のことかも知れないが、今後は、芭蕉たちの句を評する場合は、発句として評価するのか、俳句として評価するのか、すくなくとも、それくらい区別はつけて欲しいと思う。

たとえば、「木のもとに汁も鱧も桜かな」（元禄三年三月）という句は、発句として、芭蕉が会心の作ではなかったらうか。この句は、伊賀上野の小川風麦亭で催された俳諧の発句であり、この句に、風麦は「明日来る人はくやしがる春」と脇句を付け、以下、良品・土芳・雷洞らとともに、四十句の一卷を作っている。だがこの一卷は彼の満足するところとならず、同じ伊賀の連中によつて、二の折以下を新たにした歌仙も伝えられている。

尤も、この歌仙が先か四十句のものが先だったのかは未だ検討の余地があるが、ともかく同じ発句で彼は二巻の俳諧を作ったのだ。これだけでも異例であるが、三月中旬、近江膳所に赴いた彼は、この句を発句に、珍碩（洒堂）・曲水を相手に三吟の歌仙で興行し、これが漸く芭蕉の意に叶って、同年八月刊行の珍碩編『ひさご』に採録された。

木のもとに汁も鱧も桜かな

翁

西日のどかによき天気なり

珍碩

旅人の風かき行春暮て

曲水

以下、芭蕉の作品のうちでも傑作の一つとされる一卷である。これで彼は満足したのである。

「三冊子」によれば、「この句の時師の曰く『花見の句のかかりを少し心得て、軽みをしたなり』と言ったという。「汁も鱧も」というのは当時慣用された「何も彼も」という一種の成句であったというが、それを利用して、一句の調子を整えているのである。

この句を俳句とした場合、大した評価を得ていないのではないかと思う。それは誰もこの句を彼の代表的俳句として取り上げていないことでも分かる。しかし、発句は軽いのを好んだという芭蕉にとっては、理想的な発句だったのである。（校本芭蕉全集別巻月報より転載）

立机式と二十韻興行

平成三年十二月八日
於 深川芭蕉記念館

式次第

- 一 開会の辞
- 二 主幹の挨拶
- 三 立机式 開始
- 四 新宗匠 紹介
- 五 免状ならびに文台の授与
- 六 来賓の祝辞
- 七 祝吟披露
- 八 祝電披露
- 九 花束贈呈
- 十 新宗匠代表による謝辞
- 十一 記念撮影
- 休憩
- 十二 正式俳諧
- 十三 乾杯
- 十四 二十韻の連句の興行
- 十五 祝いの浄瑠璃
- 十六 閉会の辞

司会・進行 豊田好敏

中川 哲
東 明雅先生
中川 哲
中川 哲が各新宗匠の略歴を紹介する
東 明雅先生より一名ずつ拝受する 介添え 副島久美子
大林 柚平先生 矢島 房利先生
小林しげと先生 内田 素舟先生
名古 則子先生 品川 鈴子先生
中川 哲
豊田 好敏
岩井 啓子他
秋元 正江
仏淵 健悟
正式俳諧用に席を改める
東 明雅先生が宗匠となり二十韻で行う
二十韻連句興行用に卓を作り食事を配る
三好 龍肝先生
十一卓となる
お軽勘平『旅立ちの段』 中川 哲
豊田 好敏

正式俳諧

次第	役割	宗匠	東 明雅
一 席入り	宗匠	東 明雅	
二 配硯	脇宗匠	秋元 正江	
三 献花	副宗匠	杉江 平朗	
四 執筆呼び出し	副宗匠	式田 和子	
五 文台捌き	執筆	副島久美子	
六 俳諧興行	知司	豊田 好敏	
七 花前	副知司	仏淵 健悟	
八 献香	座配	上月 淳子	
九 花の句披露	座見	中田あかり	
十 端作り	花司	内田 麻子	
十一 吟声	香元	市野沢弘子	
十二 文台返し	配硯	原田 千町	
十三 作品奉納	老長	中島 啓世	
十四 挨拶			

立机披露記念

俳諧之連歌 二十韻

冬 紅葉

東 明雅 捌

吟声のけふ澄み透り冬紅葉
 玻璃越しに見る庭の雪吊
 括り糸機の準備もとのひて
 お醤油注ぎを取って下さい
 ゆらゆらと灯火揺るる舟に月
 猫を抱き上ぐやや寒の膝
 恋人のブロンズ像を二科展へ
 智恵子そのまま其処に立ってろ
 酒蔵の似合ふ町なり北の国
 集印帳に満願の夢
 振り向けば薄翅かげろふ飛び交へる
 縁台将棋月も笑ふか
 ほてりつつ動悸押へるひと愛し
 そしらぬ仕事男不器用
 山梨は風林火山株上り
 ポリのタンクで鉱泉を売る
 定年後自転車こぎを日課とし
 石鹼玉吹く孫と競争
 纏木も千木も万朶の花の中
 影もおぼろに暮れなむ頃

啓世 彬亭 正江 和子 淳子 弘子 千町 好敏 好敏 麻子 元子 澄子 雅代 義夫 一恵 政志 千雪 明雅 執筆

落葉浮く

東 明雅 捌

落葉浮く水に目だけを出せる河馬
 師走のベンチ眠る浮浪者
 塩むすびケチャップかけて食ふならん
 納得いかぬことがいっぱい
 名月も五十に近き終戦忌
 美男蔓に副へし恋文
 はちきんの好む南瓜と若き知事
 ホテルの客に見せぬ観音
 うやむやのままにてちよんと柝を打ちて
 浮世の果は粗大塵芥なり
 畑ごとに抜きすてられし夏蕪
 追っかけてくるごきぶりの月
 夢枕三億円をうまうまと
 だまし上手な下戸の口下手
 化けてでるまでに醜女の深なさけ
 どっと返品隆法の本
 心臓の葉で頭の毛が抜けて
 紙風船にこめる溜息
 神みす伊勢の国原花吹雪
 弥生の山にひびく囁り
 ※はちきん 土佐高知の男勝りの女性をいう。

品川 鈴子
 坂井 多嘉
 中川 凡
 龜井 典明
 東 明雅
 鈴 雅
 凡 雅
 鈴 雅
 嘉 雅
 龜 凡
 鈴 凡
 同 凡
 雅 鈴
 鈴 雅
 嘉 雅

文台に冬の光の溢れけり
 風情添へたる雪吊の松
 散策の池を巡りし刻ならん
 犬連れし子と口笛を吹く
 月天心高層ビルの新都心
 恋のやつれか漸寒の影
 温め酒もう一杯と思ひ差し
 ピントの合はぬ写真届きぬ
 蓼科山彼方ふはりとグライダー
 長編小説宿に罐詰
 河童忌の細き腕に針のあと
 烏賊釣舟の水尾ゆらぐ月
 香港に鷹弗どっと出まはりて
 ボディコン娘の怖い誘惑
 明荷昇きなれどごっつあんひたむきに
 ひとつぶの種土にこぼれし
 「夢」とのみ大幅かかる書院床
 媼はたはた蕨餅食ふ
 花爛漫十三詣のすまし顔
 谷から谷へ小綬鶏の声

下坂 元子 捌

下坂 元子
 加藤 治子
 本屋 良子
 北村 良輔
 中川 哲
 治 哲
 哲 輔
 良 哲
 同 治
 哲 輔
 良 輔
 同 治
 良 輔
 治 元
 良 治

龍の玉

下鉢 清子 捌

立机を祝ぐ
 暁光に輝く三粒龍の玉
 雪囲ひする隣蹠の前
 コンチェルト新譜の音の揃ふらん
 紅茶コーヒー丁寧に淹れ
 迎へ火の八尾の里に月待ちて
 後の袷で逗留の客
 甘柿を届け娘の手を握りしめ
 3K無縁この人が好き
 ○と×相殺させて当選し
 住みついてゐるお隣りの猫
 車椅子押しつつ語る星の夢
 探石会はまた下戸の会
 義経の落ちたる村は塚古び
 ソープランドのネオンちらちら
 水着の背もたれ合はせし浜の月
 夏の賞与の見積りが済み
 たまさかの揮毫の筆の心地よく
 正東風に乗ってローラースケート
 セーラーの髪に花びら花の径
 分校の窓初蝶の影

下鉢 清子
 橋本 妙
 佛淵 健悟
 市野沢 弘子
 鈴木美奈子
 松本 碧
 内田 素舟
 妙 碧
 弘 碧
 悟 舟
 弘 碧
 美 健
 美 弘
 碧 妙
 妙 碧

冬麗らわけてゆかしき立机かな
 開き初めたる蝦蛄葉仙人掌
 湖に遠く舟漕ぐ影見えて
 缶珈琲を息もつがずに
 未だ慣れぬビデオ構へる月の宴
 秋袷の女そっと引き寄せ
 うそ寒の男悩まず泣きぼくろ
 パールハーバー過ぎし傷痕
 ブロックン雲間に映る我が姿
 十字を切つて猫と目が合ふ
 水族館はんざきじつと動かざる
 西瓜畑の盗人に月
 スキャンダルほほかむりしてロック歌手
 正真正銘あなたさまの子
 若・貴の血筋のよさに応援し
 酔のものの煮物つまむ塩豆
 故郷の山懐しみ独り酒
 燕来るころ兄も鞆持つ
 大学のテニスコートに花吹雪
 たっぷり朝寝休日の昼

冬麗ら

瀧川 雅代 捌

瀧川 雅代
 内田 麻子
 諏訪 欣二
 木場田 文夫
 瀧川 雅代
 内田 麻子
 諏訪 欣二
 木場田 文夫
 瀧川 雅代
 内田 麻子
 諏訪 欣二
 木場田 文夫
 瀧川 雅代
 内田 麻子
 諏訪 欣二
 木場田 文夫
 瀧川 雅代
 内田 麻子
 諏訪 欣二
 木場田 文夫

立機式以後のことなど

豊田好敏

昨年十二月八日、猫養会主催の三人の新宗匠立機式を無事に、そして盛況のうちに終了し、事務局の一端を受け持った私として、ほっと肩の荷を下ろしたところでした。

東明雅先生をはじめ、新宗匠の皆さま、実行委員の中川哲さまのご指導を心から感謝いたす次第です。

さて、平常の感覚に戻り、いろいろと世間のことを見まわしますと、何となく世情は騒然として、俗に言うバブル経済がはじけて、気がついたらかなり後戻りしていたという事でした。

詩人にして駐日フランス大使を務めたポール・クローデルは、「極めて興味ある太古からの文明を伝えきっている日本民族」と、その著書で讃えた日本人が、平成のいま、経済のことだけで世界に優位を示している間違いが、集結して世紀末を迎えるような気がしてなりません。

それにしても立機式の会場となった深川・芭蕉記念館。ふと思ったことは芭蕉翁は「立機」をされたのだろうか。初期の『季刊連句』の中に「寛文十二年（二十九歳）伊賀上野から江戸へ下った芭蕉は立機して、地位も安定してきた延宝八年（三十七歳）の冬、杉山杉風の世話で深川の草庵に居を移し……」とありました。

それやこれや感慨にふけていた昨年の暮れ、私の座右

脇 三 体

雅

三冊子（わすれみづ）に、「猿養に脇三つを三体に仕わけてなし置きたり。心付けてみるべし」という芭蕉の語が載っている。猿養四歌仙のうち、「梅若菜」の巻だけが芭蕉の発句に乙州の脇ではじまっているが、その外の三歌仙はすべて弟子の発句に、芭蕉が脇を付け、脇の付け方の手本を示したというのである。まず、その三巻を紹介しよう。

① 鷹の羽も刷ぬはつしぐれ
去来 芭蕉

② 市中は物のにはひや夏の日
凡兆 芭蕉

③ 灰汁桶の雫やみけりきりぎりす
凡兆 芭蕉

三体とは何か。これについて古来からいろいろ説があった。能勢朝次氏の「三冊子評釈」によれば、①は仮名留、②は打添付、③は対付の格にあたるというが、南信一氏の「三冊子總釈」には①が逆付、②は位付、③は打添付という。もともと連歌の頃から脇五体というものがあり、相對付・打添付・違付・心付・頃留りと言うとされ、また、一句の止め方には韻字留と手爾波留（仮名留）の別があり、また、付方としては、物付・心付・余情付（句・響・位・面影）がある。両氏が指摘しておられるのは決して誤りではないであろうが、芭蕉の真意からは離れているのではないだろうか。

の書『水川清話』（勝海舟晩年の語録）を拾い読みして、たところ、興味ある一文を目にいたしましたので、ご照会かたがた拙い感想を述べることをお許しください。

原文「おれ（海舟）は平生から、芭蕉という人はどうしても尋常のものでない。その余徳が深く人間にはいつていることは、ただ発句の高妙なる故のみではあるまい。きつとほかに何かそのわけがあるだろう」と思っていたところ塚本定次（江州の男）のいうには、いわゆる近江商人なるものは、じつにその芭蕉の教導訓示によりてできたものだろう。このことを聞いておれは積年の疑いがここに始めて氷解して、大いに気が清々とした」とありました。

そして別のページに、芭蕉が教えた近江商人の商法が記載されています。①バイタリティーに富み、②優れた情報力を備え、③柔軟な発想と思考力を持ち、④情に左右されない合理精神を持ち、⑤優れた決断力を持ち、⑥果てし無い上昇志向をもつ、の六箇条です。

これから先は私の推測ですが、当時ようやく流通市場が活発化した元禄の世に、芭蕉翁は俳諧の旅を兼ねて、今でいうセミナーの『流通経済講座』に招かれて、東北から北陸路へ、関西へと足を伸ばされたのではなからうかと思い、なんとなく愉快になった次第です。

その外、高藤武馬氏「芭蕉連句鑑賞」は①を逆付、②を心付、③を打添付とされ、安東次男氏「芭蕉七部集評釈」は①ひびき、②におい、③うつりとしておられる。

土芳は三冊子（白さうし）において、「対付・違付・うち添・比留の類、むかしより云置所也。……」と言っているから、頃留（句の終りに頃という字が付く）を除いた、対付・違付・打添付の三つにそれぞれがあてはまれば、一番うまく行くのである。しかし、③が打添付であるのは確であるが、①は対付としても、②を違付と言えるかどうか疑問である。

もともと、この三歌仙はすべて発句が人情無（場）の句である。これに脇句を①は人情無（場）の句で受け、②は人情他の句で受け、③は人情目の句で受けている。ここに初めて着目されたのは故清水瓢左氏で、昭和四十年の俳文学会で発表されたのが初めてであった。

これは、発句が人情他の句である場合も、人情目の句の場合でも、脇の句では人情無（場）・人情他・人情目の三通りで受けることができ、それ故、右の芭蕉の句は、すべての脇句の典型となり得るのである。

脇句は打越を考える必要がないから、発句が何であろうと、人情無（場）・人情目・人情他、いずれの句も付け得るといふことは、現代の連句界では常識であるが、元禄三四年のころは、まだそこまで進んでいなかったようで、その点、芭蕉がことさらに三つの脇句の例を出したのは画期的なことだったのである。

菘虫

付勝練習二十韻

東明雅

切 締 句 投
日 20 月 4

菘虫の音を聞に来よ艸の庵

初めて涼し掛けし濡縁

海岸線波頭真白に月ありて

飛ぶやうに行くホバークラフト

心太芥子きかせてすすり込み

制服脱いだ彼とくつろぐ

さりげなくお守りだよと犬はりこ

回教国は酒も御法度

バザールに水煙草吸ふ男たち

すこし疲れて美術館出る

見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく

客待つ暖炉あかあかと燃え

据え膳は食はぬと言った嘘もばれ

電算三課セクハラの農

ゴミ袋つづく不気味な鳥たち

ちよいとそこまですててこの月

やあいようはてな名前が出て来ない

仔猫を抱いて満面の笑み

芭蕉

正雄

千遊

淳子

よしえ

元子

和久

良子

正雄

鋭太郎

達子

志げ子

藍

妙

あかり

達子

智子

十九句目

治定

花びらを糸に連ねて首飾り

1カラオケの群あちこちに花庭

2滑るやうにベントツ消えゆく花館

3乳母車嬰の熟睡に花吹雪

④花の下よそのお重に手を出す子

⑤花衣私へど風見当らぬ

6花庭ひろげ席取り無聊なる

7盛り上がり俄飛び出す花の宴

8花おぼろ抜きて醍醐の塔簪ゆ

9ささやかな家を建てしと花便り

10老二人祇王寺ひと花の中

11路地奥の行き止まりなる花大樹

12花の奥サイクリングの列が消え

13夕刊が早目に届く花便り

14洛北の寺は万朶の花の中

15花見客あふるる旅の土産店

16西行の庵訪ねん花の寺

17花の奥かすかに見ゆる火燈窓

18果見えぬ花のトンネル遍路来る

19一通は根尾の里より花便り

20クワルテット集ふ館の花明り

21旅土産出せば花びら付いてるし

秀子

智子

前句は仔猫を抱いて笑いこぼれている人、その中に、自然と明るい、あたたかい、邪気のない、庶民的な気分が滲っている。だから、どのような花の句を出そうとも、この余情を無視した句は失敗であろう。その点、1はたしかに明るくはあるけれども、前句に呼応するものが何もない。2はむしろ冷たい感じである。3にいたって漸く気分的には付味のない句が生まれたが、せつかくの嬰が熟睡している、前句とどう結びつくか問題であろう。4はおもしろかった。おそらくまだよちよちの幼児であろう。だから分別もなくお隣りの花見客のお重にも手を出すという、まことに明るくて無邪気で、前句にぴったりであり、いかにもその状況が目には浮ぶようだ。最初はこれを治定しようと思つたほどである。5これはおもしろい付けである。風は現在あまり居ないけれども、昔は隠逸の人の風格を詠む時使われたらしい。猫を抱いて風を気にする風狂の人の面影が浮かび上がる。序ながら芭蕉に「夏衣いまだ風をとりつくさず」の句があるが、そのもじりと見てもおもしろい。6これも現代花見風俗の一端である。前句とあわせて人のよい若いサラリーマンなどが浮かび上がってくる。7この句も明るさ、庶民的なところ気分は前句によく付いている。宴の一人が猫を抱いているのだろうか。その辺りが曖昧である。8この一巻に釈教の句が無かったので、醍醐の花と考えられたのであるが、前句との付味が悪い。9一句の意味はよく分かるけれども、前句とはどう結び付くのか、あるいは花便りの中に、仔猫を抱いた写真でも入っていた

のか、不明である。10述懐と釈教と旅と花を一句の中に収めたのはお手柄であったが、8と同様、付味がよくない。11同じ花大樹を出すにも路地奥では、前句の仔猫と位が合つて、その点はいいのであるが、ここでこのような場所を出す、大打越の、「ちよいとそこまで」から何か一続きの景にもなりかねない。12これは2と似たような景で、2よりはあたたかである。けれども、前句とどのようにつくか不明である。13早目に届いた夕刊に花便りが出ている。それを猫を抱いた男が満面に笑をたたえて読んでるわけであろう。14は8と殆んど同工異曲。15は7に近い。16この句も付味がよくない上、庵という字は発句にあるので失格である。17火燈窓は禅宗の寺にある上が狭く下が広がった形の窓。猫を抱いて笑う気分と禅寺では全く余情に通うところがない。18これも気分・風景、全く前句に付かない。19花便りの句は9にもあった。20クワルテットは四重奏団、この中の一人が猫好きなのか。21これは付いている。旅土産を満面の笑みをもってよるこんでいる子供たちの姿が目には浮かぶからである。さて、治定の一句、花びらで首飾りをしてよるこぶのは子供であろう。その点で4や21とともに、よく前句に付いているとともに、この句は考えようによっては自の句にもなりかねない。そこに転じの要素が含まれていて、次の挙句が出しやすくと考えた。挙句は三春の句を頂戴したい。人情は有っても無くともよいが、人情の句ならば、人情自の句である。

第六回国民文化祭ちば91

「水と緑とうたびとたち」
連句部門あれこれ

下鉢清子

「咲かせよう未来」のテーマの許に、幕張コンベンションセンターをメイン会場とした国民文化祭ちば91の、文芸部門のサブテーマは「水と緑とうたびとたち」。連句の部は十一月二十二日の房総めぐりと前夜祭、二十三日に東明雅先生の講演と実作というスケジュールで、三年前から準備に取り掛かっていた。連句が国民文化祭に取り上げられるようになって千葉は三回目、近頃の連句興隆の中、盛り上げ成功しなげればと、実行委員会を組織、顧問に東明雅先生、実行委員長は今泉宇涯先生、副委員長は上田溪水氏と私の担当となり、各部の責任者やボランティアのメンバーも決定された。緊密な連絡と会合を持ちつつ進めていった。手初めは作品募集要項作りからで、以後は途方も無い準備ばかりを要する仕事の連続、最終年の91年は出突っ張り状態となった。房総巡り案と宿泊施設の二転三転に加えて下見、応募作品の開封は序の口で、

八百五十一篇の作品のコピーを選者に発送等々、数えることもできない雑事の殺到で、老骨はフル回転させられた。特に悩まされたのは実作申込者と宿泊者の数が猫の目のように代り、実体把握の難しさ、この出席者の変動は最後まで大いに影響し、席割表作製、大会要項や作品集作りの責任者である私の不眠症を誘ったのである。右往左往している内に二十二日、ホテルグリーンタワー前から、房総めぐり参加者をバス二台で送り出すことから本番開始。三々五々到着の宿泊者や前夜祭参加者を、門外不出にしていた愛嬌で出迎え受付へ宿泊手続へとアドバイスしつつ、前夜祭の出演者「船橋ばか面踊り」の夕食弁当手配に走ったりする。「船橋ばか面踊り」の少年少女の芸に魅せられたのは五年前、前夜祭の演出に是非と勧めた責任上、大層気になる種目となっていた。十八時から開幕となった立食パーティーの、人々の間を縫って踊る子供達の面踊りは、案の定全国から参集した連衆二百四十名を魅了したのである。多くの来賓の方々からご祝辞や嬉しいのご挨拶を頂戴したが、中でも暉峻康隆氏の「格の高い立句の必要性」は心に響いた語であった。

翌二十三日は幕張コンベンションセンター国際会議場に於て連句大会が開かれた。早朝より、三百名の参加者が海の動物を席名とした四十九席に分かれて納ると、皮切りは応募作品の表彰式、文部大臣賞以下八賞の顔触れの中には、千葉市長賞の下坂元子氏、選者賞の秋元正江氏のお姿もある。続いて明雅先生のご講演「恋句の作り方味わい方」。「恋句は俳諧の秘論(連句の文芸性の秘密)を解く鍵」と、芭蕉の恋句から始まって現代の恋句の面白さを、例句を挙げて懇切丁寧に解き明かされる。既に「芭蕉の恋句」(岩波新書刊)の著書をお持ちの明雅先生、連句の山場の恋句の付け味と表現の妙味を解き上げて、連衆を艶冶な世界へと誘ったのであるが、先生のご講演の結果は早速実作に生かされたようである。ちば91の連句大会が大成功裡に閉幕した裏には、県当局関係者のご協力に加えて、日夜努力されたボランティアの方々のご尽力大なるお蔭と御礼申し上げるものである。国民文化祭実行委員会は滞り無く終わりを解散したが、私にはまだ本年に持ち越された入選作品集と、当日作品集の仕上げという仕事が残されて、目下校正中である。

第六回国民文化祭ちば91作品

半歌仙十巻 歌仙一卷

平成三年十一月二十三日
於 幕張コンベンションセンター

冬の渚

秋元正江 捌

一望の冬の渚や未来都市
きたぐに早も渡る初鶴
小抽斗端布とり出しつれづれに
ピアノ連弾譜面揃へぬ
吾子の云ふ「西瓜の尻のお月さま」
菊焚く匂ひしばし漂ふ

正江 元子 利子 雅子 由子 鳩子

菩提寺の庫裡に昇き込む今年酒
ながら族には読めぬ哲学
キャンパスの肩で風切る乙女たち
ゆづる譲らぬブライドの恋
故郷の若狭さば道病得て
草のあはひに潜む玉蟲
月涼しのれんに付けしおもり石
木刀振れば輪を忘れる
三猿の教へのいまだ身につかず
田楽を食ふ異国のひと
花吹雪世に転生のありしてふ
むらさき茜晩春の空

元 鳩 利 同 由 元 利 同 雅 同 由 元 鳩

石路咲いて

内田麻子 捌

石路咲いて安房の入江の海青し
鳶が輪を描く冬の灯台
伝統の木彫の技を受くるらん
子のコレクションジャズのCD
青銅の少年寂と望の月
色なき風の頬を撫で行く

麻子 郁子 洋子 好敏 弘子 郁

はづれ馬券舞ひて踏みつつ秋の暮
ロートレックの画のやうな女
留学生何時しかヒモになり下り
三つ子生ませて乳母車押す
弁天の手洗の小銭いろいろに
もとの元首の栄枯盛衰
月昇り友が見舞のまむし酒
袴すずしく囲碁二十年
とり上げしファミコンそとやってみる
故郷の山笑ひ初む喧
折々は栗鼠も遊ぶか花の城
ふと気がつけば春の虹立つ

弘 敏 麻 洋 敏 郁 弘 麻 郁 敏 洋 敏 洋

小六月

式田和子 捌

幕張の水と緑や小六月
続く渚に白き初鶴
外国の若人あまた集ひ来て
瓢打ち込む音の丁々
待宵にたつぷり配る握り飯
推理新刊秋の灯に

和子 健悟 よしえ 幸子 千恵 悟

複製と知りつつ名画冬支度
山の姿の変はこの頃
お隣の婆も借り出す救急車
我が指定席猫にとられる
酒の上昔のひとと間違へて
ちよっと太めが好きとセクハラ
羅を月にはにかむ尼十九
ひび割れ鉢にきよろり蘭鏡
手土産に丁稚に持たす自前物
温かな陽を背にうけつつ
俳諧の座に散り込みし花吹雪
窓を斜めによぎる蝶々

恵 幸 幸 和 幸 恵 悟 恵 幸 幸 悟 恵 幸 悟

